

令和6年度島根県立大学人間文化学部  
学校推薦型・総合型選抜 社会人・学士 帰国生 私費外国人留学生特別選抜  
地域文化学科 小論文問題

【問題】 次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

「グローバルゼーション」という言葉で表現される、人・モノ・カネ・情報が流動化し、それが総体として一元化へと向かう動きは、人々の意識や思考を大きく変化させている。

このような時代の流れを象徴するものの一つに、1972年にユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）を挙げることができるだろう。この条約の理念は、残存する貴重な文化や自然を後世に引き継いでいこうとする挑戦といってもよい。現代世界において、文化や自然の保護は、国家や地域などの枠組みを越えて、全人類の共有財産であるという認識のもと、グローバルな観点から取り組むべき課題なのである。

現代日本社会における世界遺産の社会的意味はそれだけではなかった。地方における産業の衰退、人口の減少、高齢化によって地域が地盤沈下していく現象、すなわち「過疎化」が加速度を増したとき、地方の文化や自然は観光資源としての価値を再発見されたのである。振り返ってみれば、1987年に成立した総合保養地域整備法（リゾート法）は、農山漁村の姿を短期間に大きく変えた。税制上の支援や政府系金融機関からの融資を頼りに、農村にはゴルフ場やスキー場、漁村にはキャンプ場やマリンス施設という具合に、「過疎化」の一途をたどっていた地方は一斉にリゾート地へと変身していった。いわば農山漁村はリゾート開発に地域の死活を賭けたのである。だがその努力も、バブルの崩壊に伴って水泡と化し、「過疎化」地域には大きな傷跡だけが残されたのだった。

このような状況にあって、世界遺産への登録は政府が画策した地域おこしとは別次元のインパクトを地方に与えた。なぜならまず世界遺産の最優先の理念が、文化や自然を「保護する」ことにあったからだ。それは地域の振興を、開発を伴いながら図るリゾート法の理念と根本的に異なっていた。また環境保護が世界規模で推進されていることも、グローバルゼーション時代に生きる人々の志向とマッチした。さらに世界遺産という国際基準の評価によって、地元の文化財や自然の社会的価値が高まることも地域の人々の自尊感情を引き起こした。そして最後に世界遺産を観光地化することで、大きな経済的効果が見込めたからである。現代において、①地域の活性化の手段として世界遺産を利用することは、きわめて適格的なのだ。（中略）

しかし世界遺産に登録されたにもかかわらず、三重県尾鷲市では、現在でも、強硬に登録反対運動が展開されている。尾鷲市は2004年7月に世界文化遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」（熊野古道）の中の難所として有名な「八鬼山」を有する地域であり、2006年にオープンした「県立熊野古道センター」が立地する中心地でもある。ところが世界遺産

の登録前から始まった反対運動は、いまだに収束していない。(中略)

住民Aは、熊野古道が世界文化遺産に登録される以前から反対運動を展開してきた。(中略)「古道ブームのあおりで周辺の狩猟が制限され、農林業への獣の被害が出て」おり、「せめて一定期間、古道を通行止めにし、集中狩猟は出来ないものか」と訴えている。また国道や古道沿いのあちこちに、「世界遺産 <sup>ながら</sup>名柄<sup>※1</sup>住民には大変迷惑 反対」などと書いた看板を立てている。

現実に尾鷲市におけるサル・シカ・イノシシなどの獣害は、単に農作物だけにとどまらず、人々に危害が及びかねないほど、日々、深刻化している。(中略)また尾鷲市周辺の木々は、ほとんどが植林されたものである。いうまでもなく植林された山々は人々の日常的な手入れによって環境が維持されているので、世界遺産登録によって害獣駆除や枝打ちなどの作業が禁止・制限されてしまうならば、山は一瞬にして荒廃してしまうだろう。(中略)

本来ならば、害獣駆除や植栽・伐採などの行為の裁量権は、その土地を所有する自分にあるはずである。しかし世界遺産に登録されると、そうはいかない。今後は、自分たちの生活や生業よりも、ユネスコが打ち出す方針に則って、環境の保護が優先されるからである。すなわち彼らの戸惑いは、古道の文化や自然に価値があるという理由で、私有地を全人類の共有財産へと読み替えることによって生じる違和感の表出なのである。そのように感じている人々にとって、住民Aの「獣害」と「植栽・伐採の不自由」という理由は、きわめて納得できるものだった。私的所有権に大幅な規制がかかれば、この地域では生業も日常生活も成立しないことを、人々は知悉<sup>ちしつ</sup>※2し実感していたのである。(中略)

「開発か保護か」という難問を乗り越えた地域おこしは、今、「共有財産か私有財産か」という新たな二項対立に直面している。このような相克をもたらした原因の一つに、貴重な文化や自然を保護することが「正しい」行為として、人々の意識の中に急速に浸透してきているということがある。いかに保護の思想が人々に祝福とともに受容されているかは、現在、世界中には878件もの世界遺産が登録されており、その数がもはや限界にきている(『読売新聞』2008年7月11日)、という指摘からも容易に理解できる。まさに現代は「保存する時代」なのである。

※1 三重県尾鷲市にある地名

※2 細かい点まで知っていること

出典：大野哲也「地域おこしにおける二つの正義—熊野古道、世界遺産登録反対運動の現場から—」『ソシオロジ』53巻2号、2008(一部改変)

問1 下線部①「地域の活性化の手段として世界遺産を利用することは、きわめて適格的」である理由を150字以内で説明せよ。

問2 世界遺産登録に対して賛成か反対か。文章の内容に言及しつつ、あなたの意見を800字以内で述べよ。ただし、賛成か反対かを保留する意見も可とする。